

精神障害 地域でリハビリ

地域での治療やリハビリの拠点施設
「おおえメンタルクリニックゆう」



十勝初の院外リカバリー拠点

基本方針は「リカバリー」。当事者が現状を受け入れた上で、治療やリハビリを含めて自らが望む生き方を追求する。プログラムを統括する桶田昌平医師は「将来に向けて生き方を模索する過程、それ自体のことで」と説明する。

登録しているのは20～60代の約60人で、統合失調症、感情障

生活、就労訓練 意欲引き出す

市内で大江病院などを経営する医療法人社団博仁会が、日常に近い環境でより実践的なリハビリを目指すため、院内にあったデイケア「クオーレ」を中心市街地に移転、新設した。通所利用者を支援するデイケアをメインに、外来診察、在宅の重度精神障害者を支援する「ACT十勝」部門を併設する。職員は医師2人と看護師、精神保健福祉士、作業療法士など計14人。

午前10時、「ゆう」2階のデイケアホールに約20人の利用者が集まりミーティングが始まった。「早く起きすぎました。体調はいつも通りです」。スタッフも含めて全員が発言。「今日、

害、そううつ病、高次脳機能障害など疾患・障害はさまざま。利用は毎週月曜から金曜で、1日平均20～30人が通う。

陶芸から農耕まで
午前10時、「ゆう」2階のデイケアホールに約20人の利用者が集まりミーティングが始まった。「早く起きすぎました。体調はいつも通りです」。スタッフも含めて全員が発言。「今日、

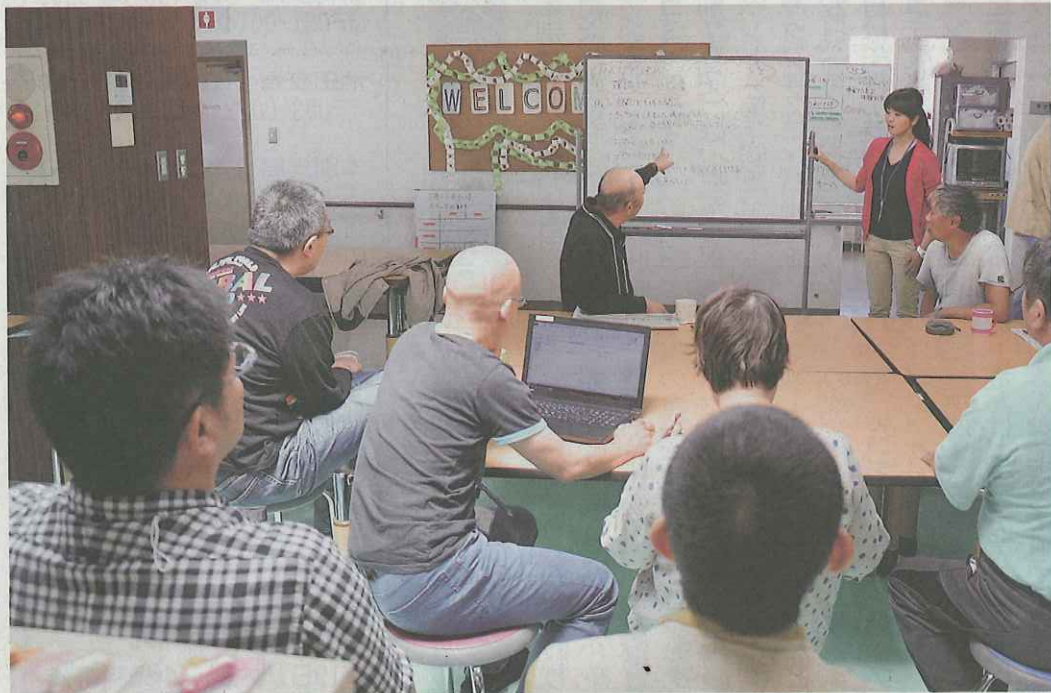
農耕クラブのメンバーは苗の買い出しにでかけます」など日課を確認する。45分ほどで終了すると、各人が希望のプログラムに参加したり、ホールでくつろいだり思い思いに過ごす。

プログラムは障害者同士が症状などをグループで話し合う当事者研究、日常の課題を想定した実践的な社会生活技能訓練(SST)など、病状や障害に即して行われる。陶芸から農耕

帯広・おおえメンタルクリニックゆう

4月に開設された帯広市の「おおえメンタルクリニックゆう」(西5南12)は、精神疾患患者や精神障害を持つ人が、

病院内ではなく地域で暮らしながら治療やリハビリテーションに取り組むのを支援している。利用者は症状や生活状況、目標に応じて「リカバリープログラム」と呼ばれる多様なデイケアに取り組み、社会参加を目指す。院外のリカバリー拠点施設は十勝管内で初めて。
(編集委員 山本孝人)



ミーティングでその日のプログラムなどを話し合うデイケアの利用者ら

「利用している仲間の顔つきが「クオーレ」から「ゆう」になって変わりました」と話すのは、梶沢孝浩さん(47)。統合失調症の病歴があり、週2、3回通所する。「日課も利用者が中心になって決める。話し合いが長引くこともあります」。当事者主体の方針を実感している。

「大切なのは、地域にある社会資源に結びつけていくことです」と桶田医師。利用者が外に出かけたり、外部の人を招くなど多様な「出会い」を仕掛け、意識や価値観を変えて次の段階に進めるよう期待する。リハビリを施設で完結させるのではなく、地域の福祉関連の事業所や各種NPO法人などと連携し、外に開かれた取り組みの充実を目指している。

ライフ
医療

と
か
ち